

2021. 12. 26 (日) マタイ2:13~15

2:13 彼らが帰って行ったとき、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。「立って、幼子とその母を連れ、エジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を探し出して殺そうとしています。」

2:14 そこで、ヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、

2:15 ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、「わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した」と言われた事が成就するためであった。

<説教>

神のみこころにかなって幼子イエスを礼拝し、自分自身をイエスにお献げした東方の博士たちを神は更に不思議な方法でヘロデの罪の共犯者となることからお守りになり、彼らを自分の国に帰してくださいました。

その神が続けて、幼子イエスとマリアとヨセフにもまた同じように、〈見よ〉と驚くべき不思議な方法で臨み、罪と悪魔の攻撃から守り導いてくださいました。(13-15)

東方の博士たちは、幼子イエスやヨセフとマリアの前からいなくなりましたが、ヘロデ王とその悪、悪巧みまでもが消えてなくなったわけではありませんでした。

イエスの敵対者とその邪悪な策略はなおも存在していましたし、むしろその罪は大きくなり、悪魔のわざとして実際に表に現れ、イエスにいよいよ向かおうとしていました。

それは幼子イエスをとことん〈探し出して〉〈殺そう〉という、執念深いものでした。

あの東方の博士たちの、そして羊飼いたちとは全く正反対の罪深い熱心さでした。

神は、人の隠れた、密かな、誰も知らないと思っている人間の心の内の思いを、全て見ておられ、知っておられるお方ですから、ヘロデが幼子イエスを「探し出して殺そうとしてい」る、密かな、邪悪な策略をすべて知っておられました。

それで神は、ヘロデが行動を起こす前に、ヨセフにそのことを知らせ、ヘロデの邪悪な企みから、幼子イエスとマリアとヨセフをその父母を守られました。

神は「立ちなさい」、「幼子とその母を連れなさい」、「エジプトへ逃げなさい」、「私が知らせるまで、そこにいなさい」と立て続けにヨセフに指示命令をなさいました。

なぜ〈エジプトへ逃げ〉なければならないのかヨセフは不思議に思ったかもしれません。

エジプトはその昔イスラエルの民が奴隷とされていた所であり、王ファラオはイスラエルの民に産まれた男の子を皆殺しにすように命じたことがありました。

なぜそんな異教と偶像礼拝の地エジプトであり、せつかく神がモーセによってエジプトの奴隷から解放(出エジプト)して救ってくださったのに、後で何度もエジプトへ帰りたいたと不平不満を言ったのがイスラエルの民の罪でした。

なのになぜまたそんなエジプトへ自分たちがまた行かなければならないのか？また少し前には皇帝アウグストゥスの命令でナザレからベツレヘムへ旅をして来ただけでも大変だったのになぜ？それで本当に幼子イエスの命を守ることができるのだろうか？見知らない土地で大変な生活になるのでは？食べていくことができるだろうか？ヘロデからは殺されなかったとしても迫害されやしないか？飢え死にしやしないか？等々の恐れや不安があったとしても不思議ではありませんでした。

しかしヨセフは（そしてマリヤも）神の命令にすぐに従いました。（14-15）

〈連れ（る）〉という言葉は、〈迎え（入れ）る〉（1:20,24）と同じ言葉です。

あの時も、ヨセフは信仰によって神に従い、御使いに言われたとおりにマリヤを〈連れ、迎え入れ〉、また生まれた子を〈連れ、迎え入れ〉ました。

ここでもヨセフはやはり信仰によって〈立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに逃れ〉たのです。

この〈逃れ〉と訳された言葉は、東方の博士たちが〈帰って行った〉（12）と訳された言葉と同じですから、ヨセフたちもまた東方の博士たちと同様にヘロデの悪しき企み神によって引き離されたのであり、ますます神の御支配のうちに守られ導かれたのです。

そしてこのエジプト逃れは、幼子イエス・キリストご自身が、幼いときから受けるべく定められた苦難を、父なる神への従順ゆえにお受けになったことを現しています。

かつてベツレヘムの宿屋に〈いる場所がなかった〉（ルカ 2:7）イエスでしたが、今やユダヤの地にさえいる場所がないという、人間（直接にはヘロデとその支配下にあったユダヤ人たち）の罪ゆえの冷遇、無礼をイエスはここでへりくだってお受けになられたのです。

そうすることがイエスをお遣わしになった父なる神のみこころだったからです。

このようにして〈幼子〉イエスは父なる神に従順に、へりくだって、ヨセフ、マリヤと共に〈エジプトに逃れ、ヘロデが死ぬまでそこにいた〉のです。

ヨセフが幼子イエスを自分の王、救い主として〈連れ〉続け、幼子イエスと共に続けたことこそがヨセフにとっての救いであり、守りでした。

ただひたすら母マリヤに抱かれ、ヨセフに守られエジプトにまで〈連れ〉られ〈逃れ〉た無力な弱い幼子のイエスが、彼らの王として、神として、ヨセフとマリヤを守り、導き、ヘロデの死後再びご自分とともに彼らをエジプトからイスラエルの地に連れ帰ってくださったのです。

それらのことは、人となってこの地上に来られたイエスが初めから受けなければならなかった苦難（別の面から言えば、イエスをエジプトに追いやった人間の神に対する限りない反逆、罪）と、しかしその苦難を通して、苦難に打ち勝って神の民をお救いになる（つまり出エジプトさせる）神、御子イエス・キリストのみこころとみわざ（もちろんそれは十字架の死による贖いまでも視野に入っています）を示しています。

そのことはマタイは「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、エジプトからわたしの子を呼び出した。」（ホセア 11:1）という預言者ホセアの言葉から引用して〈主が預言者を通して…語られたことが成就するためであった〉と言ったのです。

ホセア書 11 章には、神が出エジプトという神の恵みを受けたにもかかわらず、神の民イスラエルがその恵みと恩を忘れて神に逆らい神から離れていくがゆえに神のさばきをうけること、しかしなおも神は彼らをあわれんでくださり、再び神の後につき従う者たちがおり、神とともに歩む者たちを起こしてくださることが記されています。

〈ヘロデが死ぬと〉（19）、昔神がお立てになったモーセに連れられてイスラエルの民がエジプトから導き出されたように、幼子イエスに連れられてヨセフとマリアはエジプトからイスラエルの地に再び帰ることになりました。

そのことを示してマタイもあのととき、殊にイスラエルの民に、イエス・キリストにある神への立ち帰りを勧めたのでした。

そのように、幼くしてエジプトに行き、エジプトから呼び出されたイエスが、いわば第二のモーセとして、いやモーセより遥かに優れた完全な導き手、救い主として、今や私たち神の民として召された者を、悪魔と罪の奴隷支配から救い出してくださいます。

あのエジプトと変わらない異教と偶像礼拝の地、日本にあって、そこから私たちを呼び出し救い出すべくイエス・キリストを与えてくださいました。

また、イスラエルの民と変わらず、神に対して恩知らずで、エジプトを懐かしんでいるような私たちに、神はなおもあわれみ深くあられ、私たちの罪を示し、イエス・キリストの後に従って出エジプトするように神に立ち帰るようにと呼びかけておられるのです。